

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520007

研究課題名（和文） 道元の思想構造の総合的研究—比較思想的観点から

研究課題名（英文） A Synthetic Study on the Structure of Dogen's Thought
-From the View Point of Comparative Thought

研究代表者

頼住 光子 (YORIZUMI MITSUKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：90212315

研究成果の概要（和文）：

道元と親鸞の思想構造の比較によって、彼らが、否定性を媒介として他なる根源的な力へと自らを開くことを仏道の中心に据えていたことが解明された。そして、このような否定性の媒介の強調は、道元においては靈知説、親鸞においては一念義、多念義などの彼らにとっての異端説への対抗という思想史的意味をもっていた。靈知説にしても、一念義、多念義にしても、これらに基づく思惟は、人間知性の陥りがちな自己否定的契機の無化、世界と自己の無時間的把握であり、仏教の歴史の中で繰り返し現れる傾向である。

また道元の「現成」とハイデガーの「エアアイグニス」の比較から、彼らが先行する思想の実体論的形而上学を批判して、力動的な存在理解を宣揚したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Through the comparative study of Dogen and Shinran we make it clear that they equally had the tendency in their Buddhist Way that they were opened to the ultimate power by negation of the ego. And it means that they equally opposed the heresy theory, such as Reitsi, Itsinen-gi and Tanen-gi. Those theory, which appears repeatedly in the history of Buddhism, are based on the lack of a ego-denial and grasp of the self and the world without the sense of the transient.

And through the comparative study of Dogen's 'Genjo' and Heidegger's 'Ereignis' we make it clear that they equally criticized the substantive and metaphysical tendency of previous thought, and advocated the dynamism of existence.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：日本倫理思想史

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：道元、親鸞、『正法眼蔵』、『教行信証』、比較思想、ハイデガー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中世日本の禅者であり、日本思

想史の中でもきわめて深い思索を展開したとされる道元（1200～1253）の思想についてテキスト内在的に解明した上で、さらに比較思想的観点から、その思想的意義を比較思想的観点から多角的に検討し解明するものであるが、これらの背景となすのは、以下のような研究の現状である。

従来、道元の思想は江戸期以来の伝統をもつ宗学（曹洞宗の宗派としての学問）を中心に進められてきた。そこでは自らの信仰や坐禅体験を反映するかたちで『正法眼蔵』が読解された。特に明治期宗学において「本証妙修」をはじめとする道元理解の方向性が確立されると、宗門の内外を問わず、道元研究に大きな影響を与え、かなりの程度パターン化された道元理解が一般化されるに至った。他方、宗学とならんで近代の道元の思想的研究に大きな影響を与えたのが、和辻哲郎、田辺元ら西洋哲学研究者による道元研究である。彼らの西洋哲学の概念や理論構成を基盤とする道元解釈は、それまでのパターン化された道元の読解に新たな視点をもたらし、道元の思想を思想それ自身として研究する方向性を打ち出した点で大いに貢献した。とはいえ、その研究姿勢には、西洋哲学の概念に道元のテキストをやや強引にあてはめるといった傾向も目立った。以上のような研究状況の問題点を解決すべく、これまで道元の思想を『正法眼蔵』本文の厳密なテキスト・クリティックに基づいて、テキストそれ自身のもつ意味内容を解明するような研究を推進する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、道元の思想について以下の2点を中心に解明することである。

(1) 道元の思想構造を、その独自の世界把握を軸に、『正法眼蔵』等のテキストに内在的に解明する。

(2) (1)を基盤とし更に比較思想的観点から道元の思想的意義を解明する。

(1)の必要性については、前項でも略述したように、宗門のある程度、定型化した道元理解、また西洋哲学の概念をやや恣意的に当てはめる読解方法などが目立つ、目下の道元の思想研究状況において、道元の主著である75巻本『正法眼蔵』を中心とする、精密な道元のテキスト内在的読解に基づく研究は喫緊の課題であるといえる。

また、(2)の比較思想的観点に関しては、本研究は、これまでの点と点とを比べるような比較思想ではなくて、それぞれの思想が果たした機能・役割をより広い思想史的背景を踏まえて解明した上で両者を比較することをめざす。これまでの道元の比較思想的観点からの研究の多くはその共通性を指摘するに留まり、その共通性がいったどのような意味を持つのかについてはほとんど探求されては来なかった。このような点を鑑みて、本申請研究においては、まず、道元とならぶ重要な大乘仏教思想家である親鸞を取り上げて道元の思想との異同を探求する。特に、両者は、アジアにおける大乘仏教思想の展開の中で、共通した問題意識に基づいてその思想を展開しているという観点から、道元と親鸞の思想を比較する。また、さらに、同様の観点から、ハイデガーをはじめとする西洋思想と道元との思想の比較も行う。これによって、道元の思想、とりわけその存在論の現代的意義を闡明することをめざす。

3. 研究の方法

本研究の目的である、(1)道元の思想構造を、その独自の世界把握を軸に『正法眼蔵』等テキスト内在的に解明する (2)比較思想的観点から道元の思想的意義を多角的に検討し解明する を遂行するための具体的方法は以下のようなものである。

(1)については、道元の思想構造の文献的解明のために不可欠な、『正法眼蔵』本文の注解を、「現成公案」「仏性」「有時」「山水経」「諸悪莫作」「道得」巻等を中心に行う。こ

れらについてはこれまでも研究を行ってきたが、今回は特に、その『正法眼蔵』75巻本における用例に着目して検討をすすめる。その際、宗門の通念的な解釈や何らかの思想的、哲学的通念から演繹して解釈するのはなく、あくまでもテキスト内部の論理構造の把握を目指す。

①注釈にあたっては、テキスト本文の確定がまず必要になってくるが、この作業を行なうに先立ってまず、『正法眼蔵』本文の成立と受容について、道元教団の成立、展開史について解明する。また道元が参照したと推定される中国禅の典籍を調査研究する。

②古注、新注など現在まで多数知られている『正法眼蔵』注釈本を収集調査して検討する。

③『正法眼蔵』75巻本の特異な文体に関する検討を行う。特異な表現方法を類型化し、それらの表現方法の背景にある道元の特異な思惟方法を解明する。

④以上の作業を踏まえて道元の思想構造について、道元の存在観、世界観、言語観、真理観、行為論、時間論、自己観の観点から検討する。

(2)としては、主に親鸞思想との比較と、ハイデガーら西洋哲学の思想家らとの思想的比較が行なわれる。具体的方法は以下のとおりである。

①まず親鸞の思想について主著『教行信証』を中心として他の諸著作、書簡、関連する語録を中心に調査検討する。この検討を通じて、特に道元との比較において重要である「仏性」「空」「善悪」「身体」等の概念を解明する。

②①をふまえて、アジアの仏教思想の展開において親鸞、道元の思想が果たした役割を検討する。

③後期ハイデガーが思想と道元の思想を「現成」概念を中心として検討する。

4. 研究成果

(1) 道元と親鸞の比較

道元と親鸞の思想を「個」とそれをささえる「空-縁起なる場の力」をキーワードにして解明した。親鸞と道元については、通常は、それぞれ、日本曹洞宗、浄土真宗の開祖として仰がれ、禅思想、浄土思想という別々のカテゴリーにおいて、その思想内容が検討されてきた。本研究では親鸞と道元の思想の構造的な同質性と思想史における意味に着目して研究をおこなった。従来、宗学中心に個々の仏教者に焦点をあててきた仏教思想研究においては、このようなより広い視野からの研究はほとんど行われておらず、この点に、まず本研究の意味があるといえる。

本研究においては、道元と親鸞が究極的な理想状態として求めた「成仏」「往生」が何を意味しているのかを、それぞれ『正法眼蔵』『正法眼蔵随聞記』や『教行信証』『唯信抄文意』『歎異抄』などを通じて解明し、それらが共通の構造をもっていることを指摘した。つまり、両者の世界把握、自己把握の根底には、あらゆるものを通底する空-縁起なる場としての力の直観があり、それを自己が自覚しそれと一体化することを目指すものであることが確認された。

道元の場合は、それは、修証一等の修行というかたちにおいてその力と自己とが一体化するのであるが、その力は自己にとっては他性を残すものであるが故に、決して自己は全面的にはその力と一体化することはできない。しかし、その一体化できないという否定性を原動力として、修行が継続していく。そして、その場合の修行は、「修証一等」「仏向上」と言われ、不完全なままでそれ以外にありえないという意味で完全であるが、不完全性故にさらなる修行が必要になってくるのである。また、この力があらわれ自己と一体化することは「現成」と呼ばれる。

それに対して、親鸞は、このような力が自己に顕現してくることを、阿弥陀仏の「他力」による「信心決定」と捉える。その力の自覚

はつねに「称名」として引き出される。道元の場合は、仏祖が代々悟ってきた型である坐禅を自らも行うことがその力への通路となったわけであるが、親鸞においては、その通路は「念仏」という阿弥陀仏によってあらかじめ設定された言葉が自らのうちから引き出されることである。この称名と坐禅は、「無相」への通路となる「有相」として、自らに先行する菩薩（道元の場合は仏祖、親鸞の場合は法蔵菩薩）によって規定されているという点においては構造的に同質性を持つと捉えられる。

さらに、親鸞の場合は、称名は自力ではなく、他力によって称えさせられるものとなる。この点に関して、親鸞は他力で親鸞は自力であると機械的に解釈されることも多いが、親鸞の場合は、自力でしかありえない自己を他力によって反転し他力へと自らを開いていく絶えざる自己否定の運動において、他力が浮かび上がってくる構造になっており、自力は否定的契機として常に措定され、その都度否定されることになっている。自力の措定（そしてその否定）を不可欠とする構造を考慮するならば、親鸞思想における自力の意味は大きなものとなる。

以上のような道元と親鸞の思想構造の比較によって彼らが、否定性を媒介として他なる根源的な力へと自らを開くことを仏道を中心に据えていたことが分かる。そして、このような否定性の媒介の強調は、道元においては靈知説、親鸞においては一念義、多念義などの彼らにとっての異端説への対抗という思想史的意味をもっていた。靈知説にしても、一念義、多念義にしても、これらが基づく思惟は、人間知性の陥りがちな自己否定的契機の無化、自己絶対化、世界と自己の無時間的把握（元来、仏教はこれを煩惱として戒めてきたのであるが）であり、仏教の歴史の中で繰り返し現れる傾向である。道元も親鸞もこれらのもつ問題性への鋭い批判のもと

に自己の思想を構築したということができらるだろう。

（2）道元とハイデガーとの比較

道元の思想を後期ハイデガーの思想と比較検討した。特に道元の「現成」とハイデガーの「エアアイグニス」に着目した。ハイデガーの「エアアイグニス」は、隠されたものとして常に人間に呼びかけ続けているものであり、それに応える人間によって露わにされ続けるというダイナミズムとして捉えられる。それは、華嚴教学の摂取において、「性」（本質）の静態性を越えて、はたらきとしての真理の力動を強調した道元の「現成」概念に相当するものであると考えられる。このことは、スタティックな真理を立てる「実体論的形而上学」を批判し、「生き続けるはたらき」を宣揚したハイデガーの営為に通じている。スタティックな普遍を超えた力動的根源にまで遡るこの地点こそ、道元とハイデガーの思想の対話のみならず、「神々の争い」に満ちた現代における対話の起点として示唆的である。（詳細は雑誌論文⑭を参照）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計17件）

① 頼住光子、「日本仏教における中世と近世—「修行」から「修養」へ—」（『人文科学研究』第9巻2013年3月30日13-26 査読有）

② Mitsuko YORIZUMI, “Tradition of Japanese Zen Meditation” (Kalpakam Sankarnarayan, Ravindra Panth, Ven Thich Nhat Tu, Shubhada A Joshi “Buddhist Meditation: Texts, Tradition and Practice” K. J. Somaiya Centre for Buddhist Studies, Mumbai, India, 2012, 依頼原稿)

③ Mitsuko YORIZUMI, “A Study on a Buddhist Idea of Food Consumption” (『比較日本学教育研究センター研究年報』、第8号お茶の水女子大同センター 2012年3月31日 pp.181-185、招待発表原稿)

<http://hdl.handle.net/10083/51902>

- ④ 頼住光子、道元と西洋哲学 —「エアアイグニス」と性起の間 (『大法輪 2 月号』大法輪閣 2012 年 2 月 1 日 pp. 80-83、依頼原稿)
- ⑤ Mitsuko YORIZUMI, “The Three-World Dimension in Japanese Mahayana Buddhism — Ethical Aspects and the Language of Dogen ” (Wallner, Hashi (Hg.) “Globalisierung des Denkens in Ost und West” Verlag Traugott Bautz GmbH, pp. 22-33, 2011, Germany、単著、依頼原稿)
- ⑥ 頼住光子、「道元と時間論」(『実存思想論集 18 思想としての仏教』実存思想協会編理想社 2011 年 6 月 25 日 pp. 31-56、依頼原稿)
- ⑦ 「近代日本における宗教と教育—公教育における宗教教育の歴史」(宗教教育研究会編『宗教を考える教育—なぜ宗教教育が必要か—』第 1 章、教文館、2010 年 8 月 24 日 pp. 11-36 研究会会員として執筆)
- ⑧ 頼住光子、「親鸞の「他力」思想——「自己」と「他力」の反転をめぐって」(竹内他編『「おのずから」と「みずから」のあわい公共する世界を日本思想にさぐる』東京大学出版会 2010 年 6 月 22 日 pp. 227-255 依頼原稿) <http://hdl.handle.net/10083/48988>
- ⑨ 頼住光子、「親鸞における「自己」と「他力」—その連続性と非連続性をめぐって」(『人文科学研究』第 6 巻 2010 年 3 月 30 日 pp. 29-41 査読有)
- ⑩ 頼住光子、「聖徳太子の片岡山説話についての一考察」(『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 21 年度活動報告書 学内教育事業編』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 2010 年 3 月 31 日 pp. 237-244 査読無) <http://hdl.handle.net/10083/491>
- ⑪ Mitsuko YORIZUMI, “On Dogen” s Thought of Religious Practice and Enlightenment -An Attempt to read Genjo-Koan of

Shobo-genzo ” (『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 21 年度活動報告書 学内教育事業編』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 2010 年 3 月 31 日 pp. 32-36 査読無)

⑫ 頼住光子、「道元における「さとり」と修行——『正法眼蔵』「現成公案」巻をてがかりとして」(『日本研究所紀要』第 4 号 神田外語大学日本研究所、2009 年 10 月 20 日 pp. 27-62 依頼原稿)

⑬ 頼住光子、「道元と親鸞の「仏性」観をめぐる比較思想的探究」(『「いのち」の流れ』峰島旭雄先生傘寿記念論文集編集委員会編、北樹出版 2009 年、pp. 83-98 依頼原稿)

⑭ 頼住光子、「道元思想について—『正法眼蔵』をてがかりとして—」(『仏教文化』第 48 巻、東京大学仏教青年会、2009 年、pp. 41-53 依頼原稿)

⑮ 頼住光子、「仏教における「食」」(大学院 GP 報告書、お茶の水女子大 2009 年 301-309 査読無)

<http://hdl.handle.net/10083/35078>

⑯ 頼住光子、「道元思想—その無常観をめぐって—」(大学院 GP 報告書、お茶の水女子大学、2009 年、pp. 209-214 査読無)

<http://hdl.handle.net/10083/35348>

⑰ 頼住光子、「悪」の宗教的意義に関する一考察—親鸞と道元をめぐる比較思想的探求」(『人文科学研究』第 5 巻 2009 年、pp. 41-53、査読有)

[学会発表] (計 6 件)

① 頼住光子、「仏教と倫理—盤珪をてがかりとして」(比較思想学会研究例会発表、2012 年 2 月 24 日、大正大学)

② Mitsuko YORIZUMI, “A Study on a Buddhist Idea of Consumption of Food”

(Charles University in Prague, Faculty of Arts, Institute of East Asian Study, International conference “Consumption

and consumerism in Japanese Culture”
2011/11/14, 15. Prague, Czech Republic,
Language: English)

③頼住光子、「修行と修養」(日本倫理学会主
題別討議、2011年10月1日、富山大学人文学部、富山市)

④ Mitsuko YORIZUMI, “Tradition of
Japanese Zen Meditation” (“ 6th
Bi-Annual International Conference on
Buddhist Meditation: Texts, Tradition and
Practice ” K.J. Somaiya Centre for
Buddhist Studies, Mumbai, India,
September 3~5, 2010)

⑤ Mitsuko YORIZUMI, “On Dogen” s
Thought of the World of the Ultimate
Reality. An Attempt to Read Ikka-myoju
(One Bright Jewel) of Shobo-genzo ”
(Colloque franco-japonais Theme:
Personality and subjectivity -East and
West. Time: December 10, 2009. Time:
Place: Université Blaise Pascal ・Centre
Philosophies et Rationalités PHIER,
Clermont-Ferrand, France.)

⑥Mitsuko YORIZUMI, “On Dogen’ s Thought
of Religious Practice and Enlightenment
— An Attempt to Read Genjo-koan of
Shobo-genzo — ” (Japanese and French
corporative Seminar and Symposium
coordinator and chairperson (Theme:
Thinking, Doing, Teaching, in cooperation
with Université Blaise Pascal,
Clermont-Ferrand, France. July 18, 2009.
Ochanomizu University, Tokyo, Japan.
Language: English)

[図書] 単著 (計2件)

①頼住光子、『道元の思想 大乘仏教の真髄
を読み解く』(NHK出版 2011年10月30日
全284頁)

②頼住光子、『日本の仏教思想——原文で読
む仏教入門』(北樹出版、2010年11月5日 全

217頁)

[その他の公刊物] (計9件)

①頼住光子、放送大学テキスト、竹村牧男、
高島元洋『仏教と儒教—日本人の心を形成し
てきたもの—』第7章近世・近代の仏教、第
8章仏教と日本文化、放送大学教育振興会、
2013年 pp. 111-125, 126-142

②頼住光子、「道元に学ぶ生き方」上下(『東
京新聞』『中日新聞』、2013年2月2、9日)

③頼住光子、『正法眼蔵』は何を語っている
のか(『人間会議』冬号2012年 特集: 禅
を日常に生かす、事業構想大学院大学出版部、
2012年12月5日、pp. 32-37)

④頼住光子、「道元をかえた老典座との出会
い」(『別冊太陽 日本のあるところ 197 道元
いま、此処、このわたしを生きる』平凡社
2012年7月20日 pp. 34-35)

⑤頼住光子、「道元の死生観」(同上 pp. 91)

⑥頼住光子、「瑩山」(『古寺をめぐる心の法
話 總持寺江川辰三』、朝日新聞出版、2012
年4月25日、pp. 16-17)

⑦頼住光子、「道元」(『古寺をめぐる心の法
話 永平寺福山諦法』、朝日新聞出版、2011
年6月25日、pp. 16-17)

⑧頼住光子、和辻哲郎『道元』解説(河出書
房新社、2011年5月20日 pp. 184-191)

⑨頼住光子、峰島旭雄監修、西城宗隆・保坂
俊司・頼住光子編集『浄土教の事典—法然・
親鸞・一遍の世界』(東京堂出版、2011年3
月1日 pp. 1-383)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

頼住 光子 (YORIZUMI MITSUKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科
学研究科・教授

研究者番号: 90212315

(2) 研究分担者: なし

(3) 連携研究者: なし